

## 5-2 湖底地形

湖底の深さや形状は一様ではなく、水深70m以上の深くて広く湖底平坦面をもつ北湖と、水深5m以下の浅くて狭い南湖とに分かれます。

### 1. 概要

和楽器の琵琶の形に似ていることに由来する我が国最大の湖「琵琶湖」の面積は670.25km<sup>2</sup>で、滋賀県域総面積の約1/6を占めています。湖水面の標高は大阪湾の干潮位(O.Pb.)+85.614mです。その湖底の地形は「等深線図」と「横・縦断面図」からわかります。最深部は安曇川の河口沖(図中の\*地点: -104m)で、海面より-18mほど下位にあたります。

### 2. 北湖の湖底地形

湖底の主体である北湖は、さらに北西—南東方向の北湖盆と、北東—南西方向の中湖盆が組み合わさって北方へと傾く「逆くの字」形の平面形態を示しています。また北湖の湖底は西方沖合へと緩く傾斜していきますが、その西側は急崖となっており新期の地殻変動を反映しています。北湖岸は沈降性で、若いリアス状の地形が湖底へと続き、葛籠尾崎沖の水深40m~60mには湖底谷が存在しています。さらに野洲川・日野川・安曇川・姉川の沖合には湖底段丘が存在し、それらは内陸側に発達する段丘に対比できます。沈水三角州が重合したもので、我が国の湖沼では唯一と言われ、注目されます。湖中には、沖島・沖の白石・竹生島および多景島などの湖中島や舟木の沖合には水没島も存在しています。このように北湖の形状と湖底の地形は、造盆地運動に伴う活構造に起因している若い地形であることを示しています。

### 3. 内湖

沿岸の湖岸帯には、流入河川群によって運搬されてきた土砂がつくった三角州や扇状地の地先が鏡餅状に累重しており、そこには漣痕や砂州、小凹地などの微地形が形成されています。さらに沿岸部には付属湖である多数の内湖が存在しているのも琵琶湖岸の特徴です。浅くて平底からなる内湖(ラグーン)は、通常は海岸に形成され潟・潟湖と称される湖沼と同様な形成プロセスをもっています。しかし内湖は、その周辺の湖岸低地と共に近世以降食糧増産のため干拓が進み、さらに都市周辺では開発のため埋め立てられ消滅してしまったものも多くあります。一方、埋立地の地先の舟入りや水路の交差部、一部には魚釣り場などの区画としてコンクリートで囲まれた人造(工)内湖も出現しています。

### 4. 南湖の湖底地形

南湖では、湖域が沖積作用によって急速に埋積されており、湖沼の発達ステージとしては終末の状態に近く、このため平均水深は3m、中心部の水道(漕筋)にあたる部分でも水深4~5mにすぎません。水深2~3mの浅い湖底域には縄文~弥生の遺構が存在していることから、沖積平野が2次的に沈水した地域であることがわかります。このことは歴史時代においても、局地的な地変(地震)がくり返し生起していることを示しています。

要するに琵琶湖の湖底地形は、基盤起伏を変形させる変動地形が卓越し湖盆の変形が進行中の北湖と、堆積作用によって埋積が進みいったんは沖積平野と化した部分が沈水した南湖の部分からなります。このため湖域および湖底は対照的で、こうした地域的多样性を看過してはならないのです。

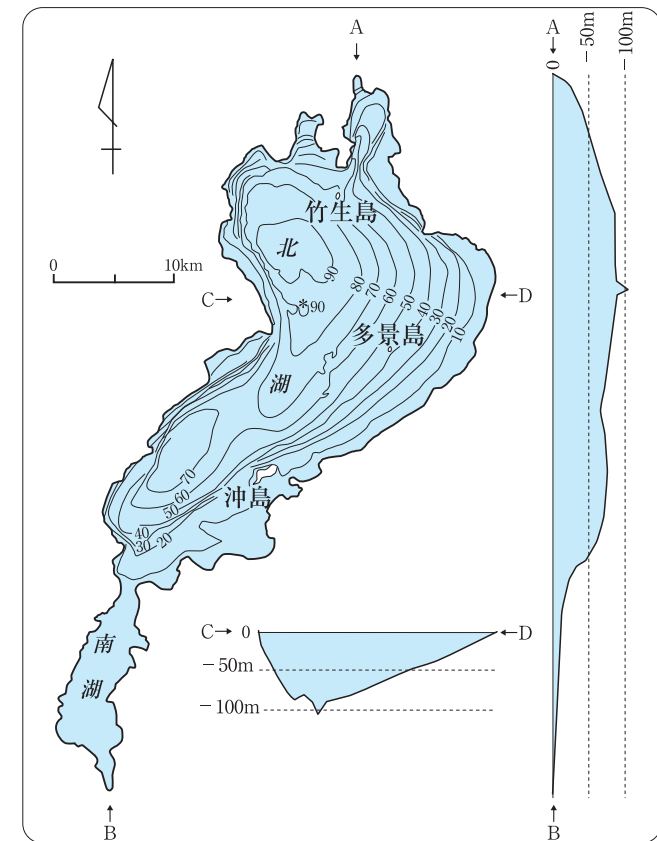


図5-2-1 等深線図と最深部を通る湖底の断面図

奈良大学(名誉教授) 池田 碩